

第10回 奥州市民★文士劇

ヤマトタケル

—— 帰ろう！ヤマトへ、まほろばの国へ ——

ヤマトの皇子オウスノミコトは、誤って兄を殺してしまい、父のオオキミ（天皇）の怒りを買う。継母のオオキサキ（皇后）の陰謀で、罪を償うため南のクマソを征伐するよう命じられる。

叔母のヤマトヒメから神の霊力が宿った剣を授けられたオウスノミコトは、クマソを支配するアニタケルとオトタケルの兄弟を討ち、ヤマトタケルと名乗ることになる。だが日本統一の野望に燃えるオオキミは、休む間も与えず直ちに北のエミシを攻めよと命じた。

やがて妻のタチバナヒメの犠牲で危機を脱したヤマトタケルのもとに、ようやく帰還命令が届くのだが…。



1 クマソを征伐に向かうタケルは叔母から名刀「天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）」を授かる 2 クマソのリーダー・オトタケル（右）との対決 3 タケルの恋人タチバナヒメ（右）が入水して嵐を静める 4 タケルが死に、親族らが集まるラストシーン



あふれる情熱が感動を呼ぶ 奥州の市民劇

ことしも3つの会場で上演された市民による手作りの舞台。厳しい寒さの中、大勢のキャスト・スタッフが準備や稽古に励んできました。笑いあり、涙ありの感動の作品ばかり。どの会場にも多くの観客が詰め掛け、カーテンコールではキャスト・スタッフに惜しみない拍手がいつまでも送られていました。

◆ 1月27日、1月28日
第10回奥州市民★文士劇
「ヤマトタケル 帰ろう！ヤマトへ、まほろばの国へ」
江刺体育文化会館（ささらホール）

◆ 2月18日
第18回奥州前沢劇場
「むつざくら 前沢地ビール物語」
前沢ふれあいセンター

◆ 2月24日、2月25日
第34回奥州胆沢劇場
「角塚の疾風」
胆沢文化創造センター

第18回 奥州前沢劇場

むつざくら

前沢地ビール物語

まだ、幕末の暮らしが色濃く残る明治十年代の前沢。村木屋酒造の跡取り息子である宏太郎は、思いを寄せるおゆきのいる叶屋に毎晩のように通って、小さいころから親しくしていた土族の仲間と飲んでいた。

ある日、宏太郎は叶屋で後藤新平から、時代が変わり、日本が置かれている状況が今までは全く変わっていること、西洋にはビールという飲物があることを聞く。その話を聞き土族の仲間には自分の将来を考えはじめるが、家業を継ぐとばかり思っていた宏太郎は将来のことが考えられず、仲間の話についていけない。そんなとき、石巻支店へ船便での配達を父から頼まれた宏太郎は、おゆきに好かれたい一心で引き受ける。心配する祖母を説得しての出発だったが、そこで…。



1 後藤新平（中央右）から社会情勢や西洋にあるビールの話を聞く宏太郎と仲間たち 2 石巻への出発を祖母に懇願する宏太郎 3 ビア酒「むつざくら」の醸造を決意する宏太郎とおくみ 4 ついに完成したビア酒の出荷を皆で喜ぶ

第34回 奥州胆沢劇場

角塚の疾風

時は8世紀、先祖代々角塚古墳を守ってきた集落の長アワソとイサワの民は、毛皮などの物々交換により、朝廷とも良好な関係を築いてきた。しかし時の帝が代替わりすると、蝦夷への侵略が進み、各地で争いが起こっていた。その侵略の手がイサワにも近づいていることを知ったイサワの民は、自分たちの誇りを守るために戦うことを決意する。

その頃朝廷では、時の権力をものにできるといわれる「弦月の瞳」を探していた。天皇は、陸奥の国にあるというこの「弦月の瞳」を手に入れ、難航していた蝦夷征伐を推し進めようとしていたのだ。

一方、イサワの地では、朝廷に仕える鳥取部衆のタケマロが、熊に襲われたところを、アワソの娘・オトシロが助け、村に連れ帰り看病する。朝廷に仕えながらも、狩りをしながら旅をするタケマロは、自然に対する気持ちがイサワの民と通じ、次第に交流を深めていく。

怪我が回復したタケマロは、看病のおれにと、18年前鶴を仕留めたときに手に入れた勾玉をオトシロに渡す。するとその勾玉は赤い光を放ち、オトシロはその場を逃げるように去っていく。その勾玉こそが、「弦月の瞳」なのである。

その不思議な光景を目撃した朝廷側の人間は、「弦月の瞳」の在りかを確信し、イサワへと侵略の手を伸ばすのであった。

朝廷軍との戦いの行方は？そして、「弦月の瞳」に秘められたものは…。



1 狩猟の命の恵みに感謝の舞を捧げる蝦夷・イサワの民 2 夜に照らされ蝦夷の心を語るオトシロ（左）とそれに聞き入るタケマロ 3 朝廷軍使者・岐婆都（キバツ）が大蛇に化身。オトシロが立ち上がる 4 角塚の上から現代を見つめるオトシロとタケマロ